

第54号 「多様性」

私は出雲出身で、出雲市立塩冶小学校と出雲市立第二中学校が母校です。この2校において、ここ数年で全国的にも話題になっているのが、多くの外国籍児童・生徒が在籍していることです。企業就職の関係で、外国から多くの方々が出雲市で暮らしていらっしゃいます。外国から来た子どもたちが最も大変な思いをしていると思いますが、受け入れる自治体と学校も試行錯誤しながら学びの保障を行っているようです。私が子どもだった頃には想像できなかった環境の変化が、現実として起こっています。

さて、このような環境変化を表す言葉として、多様化という言葉をよく使います。そして教育の世界では、「多様性を認め合うことが大切」と言います。では、多様性とはそもそもどういう意味を持っているのでしょうか。

辞書によると、「いろいろな種類や傾向のものがあること。変化に富むこと。」と記してあります。組織においては多様性が高い方が有利に働き、逆に画一的で同じような人しか存在しないような組織は、環境の変化に対応できにくいとされています。

現在、島根県の高校では「しまね留学」として多くの県外生徒を受け入れています。育ってきた環境が異なる生徒が同じ空間・時間を同じ場所で過ごす環境作りを積極的に行い、様々な出身地域の生徒がお互いの価値観を認め合い切磋琢磨しながら学校生活を送る。これからのグローバル社会を生きる若者にとって、多様性を認め合える関係作りは大変重要です。そのためには、自分にはないものを他者から吸収しようとする意識を一人一人が持つことが最も大切だと思います。

音楽における演奏においても、様々な表現が存在します。自分とは異なる演奏を聴いたとき、「こんな表現があるんだ」と気づいて自分の表現に生かそうとするのか、「こんな表現はありえない」と排除してしまうのか、この違いが自分の音楽性を広げるための重要なポイントとなります。もちろん、人には好みがあります。すべてを受け入れる必要はありませんが、受け入れることができないと思った価値観を排除するという排他的な考えだけは持たないようにしないといけません。このことが、差別のない心温まる社会につながると私は思っています。

アメリカの第35代大統領であるジョン・F・ケネディは、次のような言葉を残しています。『互いに相違点があることは認めよう。たとえ今すぐ相違点を克服できないにしても、少なくとも多様性を認められるような世界を作る努力はできるはずだ。』